

## 1) 国語科

### ア 今年度の取り組み

昨年度までと同様に、校内研修会や他校視察から得た情報や知識を教科内で共有し、実践できるものは積極的に取り入れた。加えて、これまでの学習指導案の形を変え、発問を中心に指導を計画する「授業デザイン」を用いた。(詳しくは、実施事例にて紹介。)

特に今年度は、地区の国語科担当者会議があり、他校の先生方にALの授業を見ていただいた。思考を深める手立てや方法については評価いただけたが、一方で、生徒自身が目標の達成を顧みる「評価」がまだ不十分であるという課題も明らかとなった。昨年度作成したルーブリックを活かしてはいるものの、使い方についてはまだ検討の余地があるように思われる。

さらに、「思考力・判断力・表現力」の問題についても、引き続き定期考査にて出題した。生徒の記述力が上がってきており、無解答や見当違いの解答は少なくなった。しかし、その難易度の設定については、容易すぎるとただの記述の問題となり、難易だと解答されないという課題が残る。

### イ 実践事例

#### ア) 1年生現代文の実践事例

教科	国語	科目	国語総合現代文	授業者	成瀬和康
実施日時	平成30年11月6日(火) 5時限			対象クラス	1年 F組(31人)

【第一段階 求められている結果】※理解の6側面(説明、解釈、応用、パースペクティブ、共感、自己認識)

単元名	小説「海の方の子」(山田詠美) 関連教材…評論「遅れてきた私」(若林幹夫)
④ 単元目標	9歳の私が哲夫との「共時性」を体験することによって、「こまっしゃくれた」生き方とは違う生き方に気づいた喜びを読み取り、表現する。
◎本質的問い	ヒトは何によって「自分」を知ることができるか。
①理解 重大観念 と誤解	①個人による知識や経験の習得のみでヒトは成長できるという誤解を解く。 ②違う環境、違う価値観を持った他者との「共時性」を体験することにより、ヒトは社会的なつながりをもつ人間としての自分を実感するという重大観念を理解する。
⑧知識 ⑤技術	⑧小説欄外の慣用表現の意味と用法、小説の語り手が一人称の敬体背あることの効果 ⑤関連教材の表現を取り入れて、指定字数で問われている内容をまとめられる。

【第二段階 評価のための証拠】

評価の証拠	生徒(グループ)の応答、生徒の質問、観察
ルーブリック	有(別紙) ・ 無

【第三段階 学習計画】

#### ① 各授業のテーマ(主となる学習活動の内容や問い等)

第1時の内容	段落構成を理解する。第1段落を音読し、私はどんな人物だったか。
第2時の内容	第2・3段落を音読する。私は哲夫をどういう人物を見なしていたか。
第3時の内容	第4・5段落を音読する。哲夫の家庭事情を知った私はどう考えたか。
第4時の内容	第6・7段落を音読する。哲夫から自分の内面を指摘された後の私はどう変化したか。
第5時の内容	第6段落を中心に主題をまとめる。私はなぜ「結婚」という言葉を使ったのか。(本時)

② 予習 ( 有 ・ 無 )

内容・分量	本文全体の黙読 (30分) ・わかる範囲で全体を7段落に分けておく。(10分)
-------	---

③ 問いの構造 ※GWグループ活動、MMマインド・マップ、WSワークシート

①つかみの発問 (導入の発問) 3分	「結婚」という言葉からどのようなことを連想するか。 小説中の私のような言葉を使ったことがあるか。→⑤⑥
②課題提示の発問 5分	9歳の私が、哲夫になぜ「哲夫さんと結婚するような気がする」と言ったのか。 個人→GW
③思考拡散の発問 10分	「私」は哲夫とどのような心の交流を積み重ねていったのか。個人→GW (哲夫宅への小旅行を始めた第4段落から第6段落までを読み直してみよう。)
④思考焦点化発問 5分	哲夫とのいくつかの交流場面で、私がその後に「結婚」という言葉を発する誘因となったやりとりはどれか。小説のタイトルはどのような意味か。
⑤思考深化の発問 (洞察促進発問) 20分	9歳の私が発した「結婚するような気がする」は、実際の「結婚」の意味ではないとしたら、このときの私の心理をどう説明したよいか。(関連教材の評論「遅れてきた私」の文章を参考に、指定条件でまとめ発表する。) GW
⑥評価の発問及び生徒の質問 7分	本授業で明らかになったことを参考に、この小説が読者に投げかけたことを問いの形にしてみよう。(質問例: ヒトはどうやって成長するのか。ヒトは何によって「自分」を知ることができるのか。) →個人/WS

【参観した先生方の意見・感想】

- ・「授業デザイン」を事前に生徒に示してあり、生徒たちが、いつ・何をすれば良いのかがよくわかるように工夫されている新しい授業展開で、新指導要領実施に向けて、大変参考になった授業であった。
- ・一つの課題についてじっくり考えさせ、さらに既習の評論と関連させ解答を作らせるという、次期の大学入試に向けられた授業だと感じた。
- ・グループごとに考えた解答を板書させ、添削することで、記述のポイントを共有できる方法は力をつける有効な手段だと感じた。

イ) 2年生古典の実践事例

教科	国語	科目	古典B	授業者	後藤 久美子
実施日時	平成30年11月15日(火) 5時限			対象クラス	2年 B組(40人)

【第一段階 求められている結果】※理解の6側面(説明、解釈、応用、パースペクティブ、共感、自己認識)

単元名	『伊勢物語』 東下り
⑥単元目標	物語の背景にある歴史事項を理解し、本文の現代語訳だけにとどまらない深い読みを行う。またその内容を意見として発表する。
⑩本質的な問い	「男」はなぜ東に下ることを決意したのか。
①理解 重大観念と誤解	・平安時代の「藤原氏」と「在原氏」の歴史(流れ)を理解する。 ・「男」(在原業平)と「藤原氏」の立場の違いを理解し、本文に描かれていない背景を推測する。
⑧知識 ⑨技術	⑧和歌の知識 ⑨本文から、「男」の心情が表れている表現を見つけ出し、それらを統合して考えをまとめることができる。

【第二段階 評価のための証拠】

評価のための証拠	振り返りシート、生徒の応答、生徒の質問、観察
ルーブリック	有（別紙） ・ 無

【第三段階 学習計画】※ W（目標）H（関心）E（経験）R（振り返り）E（評価）T（調整）O（組織化）

① 各授業のテーマ（主となる学習活動の内容や問い等）

第1時の内容	前年度学習した「芥川」の確認。
第2時の内容 (本時)	物語の歴史的背景について学ぶ。それを踏まえて主人公の「男」の心情に迫る。

② 予習（有・無）

内容分量	「芥川」の内容を通して、「男」の人物像を考える。
------	--------------------------

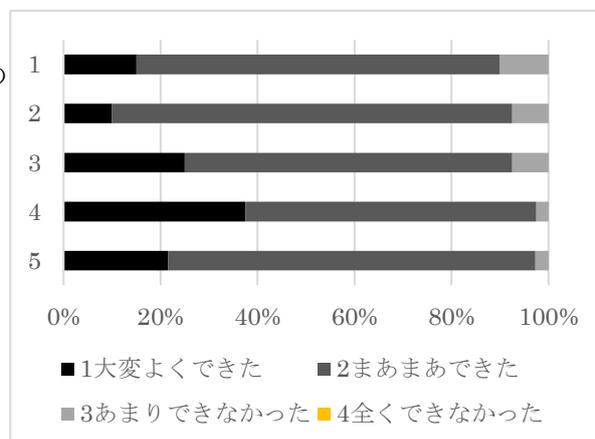
③ 問いの構造

①つかみの発問 (導入の発問)	「藤原氏」と「在原氏」はどのような関係であったか。
②課題提示の発問	「男」はなぜ東に下ることを決意したのか。
③思考拡散の発問	「藤原氏」（藤原高子の父親・兄たち）は「男」について、どのように思っていただろうか。
④思考焦点化発問	「藤原氏」と「在原氏」の関係は、「男」にどのような影響を与えたか。
⑤思考深化の発問 (洞察促進発問)	作中の歌に詠み込まれている「妻」は高子か。
⑥評価の発問及び 生徒の質問	高子でないとしたら、「男」はなぜ「身をえうなきものに思ひなした」のか。

【生徒へのアンケート結果】

授業後、以下のようなアンケートを取った。

- あなたは、「藤原氏」と「在原氏」の歴史の内容を理解できましたか。
- あなたは、和歌の内容を理解できましたか。
- あなたは、グループ学習（話し合い）に積極的に参加できましたか。
- 今日のあなたの班の発表はどうでしたか。
- 「男」（業平）の『心情』について、他の班の発表は理解できましたか。
- 今日の授業の反省（一部抜粋）



- 他の班の話を聞き、理解を深めることができた。
- 自分だけだと和歌の内容が理解できなかったけれど、みんなの意見を通して理解できた。
- 自分の意見が持てたから、続けたい。
- 色々な考え方を知ることができて良かった。
- △日本史の話が分からなくて理解できないところが多かった。
- △語彙力が足りないと思った。

### 【授業者の反省・感想】

藤原氏と在原氏の関係、そして摂関政治についてスライドで学習し、その後プリントを用いて考えを深めるという教科融合型の授業を試みた。一時間の中で新たな知識を得、古文の読み取りを行い、それらを融合して課題解決を目指し、話し合い、発表まで行ったため、それぞれの活動に十分時間をかけることができず、結果として多くの生徒を消化不良にさせてしまった。授業の目的を明らかにし、それに伴って活動の内容を精選することの大切さを改めて感じた。

また、授業デザインについては、「本質的な問い」を設定するのが難しく、深い考察に導く問いを立てられなかったことが反省点である。授業後に再考し、以下のようなデザインを考えた。今後の授業に活かしたい。

①つかみの発問	文学作品（昔話、童話）にはどのような「鬼」が登場するか。
②課題提示の発問	文学の虚構性は、作品にどのような影響を与えているか。（本質的な問い）
③思考拡散の発問	最後、高子を一口で食べた「鬼」は何か。
④思考焦点化発問	業平のことを快く思っていない人物とは誰だろうか。
⑤思考深化の発問	伊勢物語の作者は、なぜ歴史的事実（藤原一族が高子を連れ帰った）を描かずに、「鬼」と表現したのか。
⑥評価の発問及び生徒の質問	「鬼」である必要はあったのか。もし、違う形で描かれていたとしたら何が考えられるか。

### ウ 「思考力・判断力・表現力」を問う問題【一年 国語総合 現代文】

問	本文（鷲田清一『わかりやすいはわかりにくい』）で述べられている「（近代以後の）ひと」を、前問【一】の小説『羅生門』における「下人」と比較して、共通点と相違点をまとめてみた。共通点は「ともに今後どう生きるか悩んでいる（いた）点」とまとめられるが、相違点はどのようにまとめられるか。 以後の条件を満たすようにして百字以内でまとめなさい。 ・「…下人は、…ざるをえなかったのに対し、…近代以後のひとは、…ざるをえないという違い。」というフレームにして、必ず一文でまとめること。 ・「下人」の文節にも「ひと」の文節にも「出自」という語を各一回ずつ使うこと。
---	---

#### ○生徒に示した模範解答

「出自によって差別されていた下人は、飢え死にか盗人かを選ばざるをえなかったのに対し、出自に左右されない世界に生きる近代以後のひとは、自分が「やりたい」ことをみずからに問わざるをえないという違い。（九十六字）

#### ○解答状況

フレームを崩さずほぼ同意のものを正解として採点した結果、学年全体の4割弱（約70名）が満点だった。一方、全くフレームを作れない者、白紙解答者が学年全体の1割あまり（約20名）いた。

### エ まとめ

今年度は、新制度入試を受験する生徒が入学し、その対策に向けて積極的に活動した一年であった。しかし、評価の仕方（ループリックの使い方）や新制度入試対策問題の作成については、まだ検討の余地があるように思う。実施と反省とを繰り返しながら、より良い方法を模索していきたい。  
（文責：後藤）